とやま日季 にっき

富山の素顔の、素敵な日々。

実りは、
暮らしのなかにある。

2014 秋

とやま 暮らしの素　江尻 裕さん、美佐子さん
石井隆一のとやま対談　〈ゲスト〉鈴木忠志氏

今日の朝ごはん　井上育美さん
とやまの素「水」
大切な場所、好きな時間おでかけリポート　但田克美さん
いいもの手帖「桂樹舎のふくさ入れ」　下尾さおりさん

くらしたい国、富山

八千八谷の険しさと、濃縮される出会い。

◎黒部市・黒部峡谷

富山県東部にある黒部峡谷は、鷲羽岳（わしばだけ）を水源とする黒部川が流れる日本最大規模の谷。切り立った断崖の連続は、簡単には人を寄せ付けない。江戸時代には入山が厳しく制限されていた奥山。明治時代には登山家の冠松次郎らが探検したことで知られている。電源開発のため大正時代から軌道工事とダム建設が進められ、昭和12年には欅平（けやきだいら）までの約20キロの軌道が開通。昭和38年には黒部ダムが完成した。

黒部ダムの上流と下流は、いまも多くの登山家を魅了する地。その一方で、宇奈月から終点の欅平までは、黒部峡谷鉄道のトロッコ電車で、誰もが気軽に大峡谷の懐に入っていける。

最高でも25キロという速度で、切り立った断崖を走るトロッコ。トンネルの手掘りの跡を見ると、当時の人々の苦労と情熱が伝わってくる。黒部峡谷鉄道総務部企画広報係の佐々木裕二さんが、沿線の秋の見所を教えてくれた。

「鐘釣駅直前の錦繍関（きんしゅうかん）や、欅平の奥鐘橋の下から、黒部川越しに眺める紅葉も見事です。また、途中下車して河畔でのんびりするのも、お勧めですよ」

降り立ったのは鐘釣駅。鐘釣温泉は江戸時代から続く湯治場だ。河原に湧く露天風呂を求めて、いまも全国から多くの人が訪れている。岩に囲まれた河原の湯で体を休め、大自然にしばし抱かれてみる。久しぶりに携帯が通じない場所で、贅沢な時間を味わった。

宿のご主人にお話を伺うのも楽しい。黒部峡谷の凄さは、人のスケールでは簡単には測れないと同時に、心身が浄化され、出会いが濃縮されていく場だとも感じた。無駄なものを脱ぎ捨て、自然に還っていける得難い時間がある。

【黒部峡谷鉄道】　日本一深いV字谷を走る黒部峡谷鉄道。宇奈月から欅平まで約1時間20分。走行距離は20.1km。季節ごとの絶景を堪能できる。4月中旬～11月30日まで運行（4月～5月初旬は一部区間運行）。欅平では来春に向け、高低差200mの関西電力竪坑エレベーターを活用した新周遊ルートの整備も進められている。
◎TEL.0765-62-1011　◎受付時間 9:10～17:00　◎http://www.kurotetu.co.jp/

とやま暮らしの素（もと）。

第1回

南砺市／林業家

江尻 裕さん、美佐子さん

人の知恵と森の資源を
生かしながら、
この村を次世代へつなぎたい。

南砺市利賀村は深い山々の恩恵をうけながら、自然と共に生きる暮らしの知恵にいまも満ちあふれた場所だ。家族でこの地に移り住み、持続可能な村のあしたを模索している人がいる。

故郷に戻り、公務員から林業家へ

村の朝は澄んだ光と空気に包まれ、樹々も川もひと際輝く。富山県西部にある南砺市利賀村（なんとしとがむら）は、標高１０００メートル以上の山々に囲まれ、庄川、利賀川、百瀬川が深い谷をつくる人口約６００人の村。面積の97％が森林で、世界遺産で知られる五箇山の一部。民俗文化の宝庫だ。

自然に恵まれた利賀村では、いきいきと暮らす魅力的な人が多いが、林業に携わりながら、森の資源で山のあらたな価値を生み出そうと活動する人がいる。江尻 裕さん、美佐子さん夫妻だ。

「もともと田舎暮らしや自然のなかの仕事への思いがありました。初期投資が少なく、元気な体があればできる林業がいいなと考え、富山の実家から比較的近い県内外の自治体に手紙を出しました。すると、一番最初に返事がきたのが利賀村でした」と、裕さん。

富山市出身の裕さんと、岡山出身の美佐子さんは静岡の大学で出会い、結婚。裕さんは静岡県の県職員として、美佐子さんは日本語教師として働きながら2人の子どもを育てていた。しかし、富山に住む裕さんの祖母の介護などをきっかけに、16年前、裕さんが32歳の頃に富山への移住を決意する。

利賀村では当時、住まいと仕事を斡旋する制度も整っていて、熱いラブコールを受けて、裕さんは森林組合に就職。一家は裕さんの実家から車で1時間ほどの利賀村上百瀬に移り住んだ。

引っ越した3月末、静岡では菜の花が咲く暖かさだったが、利賀村の家はまだ2メートルの雪に覆われていた。しかし、雪のない土地で育った美佐子さんは、その豪雪に魅了された。

「踏み跡のない白い雪が、もう、うれしくて。数年で飽きましたけど（笑）」

美佐子さんも建設会社の仕事を得た。

木の根曲がりを生かした見事な梁と、柿渋やベンガラで赤く塗られた柱が印象的な江尻家。もとは合掌造りで、大きな広間、立派な座敷がある。約50年前に現在の場所に移転改築されたもので、10年前に江尻さんが買い取った。リフォームしたリビングには美佐子さんの憧れだった暖炉が設けられ、冬の寒さからも解放された。家の横ではニワトリも飼っていて、生みたての卵をお菓子づくりや料理に使う。

子育ての面でも「親が体を使って頑張っている姿を見ていることが、教育上とてもいいのでは」と夫妻は語る。小学校中学校合わせて子どもが34人と少ないが、学習発表会、運動会などは子どもたち自ら企画・運営する。当然、出番も多く、子ども一人ひとりが存分に力を発揮したり、活躍できる場がある。自然に自主性も体力も養われ、人前で話す力も身についていくと言う。

現在、長女は東京の企業でウェブデザイナーとなり、長男は石川県の学校に車で通学。そして、利賀村で生まれた次女の蕗さんは中学3年生の受験生。利賀村には高校がないため、来春からは富山市内の高校に、裕さんの実家から通学する予定だ。

移住当初は地域総出の祭りなど、独特の風習に驚くことも多かったが、すぐに村の暮らしに溶け込んでいった。

「子どもたちがいたことも大きかったですね。それに、人手が貴重な利賀村では、寄り合いや草刈り、江ざらいなど、いつもお互いに声を掛け合い、みんなで体を使って協力し合います。村の生活は忙しいんです（笑）。60代、70代は元気盛り。どの家も、親やお年寄りをすごく大切にしていますね」

山の恵みを糧にしてきた村では、暮らしの道具を手作りしたりと、昔からの生活の知恵を受け継ぐ名人が多い。

「山仕事について、私たちもまだまだ教わりたいことが多い」と話す。

江尻さん夫妻は3年前に独立し、一般社団法人moribio（モリビオ）森の暮らし研究所を設立。杉の枝打ちや草刈り、植林など従来の森林管理はもちろん、環境教育、山の環境調査、そして、森の低層に生えるクロモジなどの資源を生かした商品開発をスタートさせた。

理屈を超えた、幸せな時間が山にある。

毎朝7時半には村の林業研修施設にスタッフが集合し、チェーンソーなど仕事道具を入念にチェックしてから山に出発する。森林組合時代から共に働く長崎県出身の松田靖さんら、別の仕事から転職した20代、30代の若者を含めて8人。砺波平野の屋敷林など、レッカーが入れない場所でのロープを使った巨木の枝打ちや伐採も得意とする、高い技術を持った山のプロたちだ。

みんなが出発する際に、美佐子さんは必ず「ご安全に」と声を掛ける。舗装されていない林道や、そこからさらに1時間も歩くような急斜面での山仕事もあり、つねに危険を伴うからだ。やはり、山の仕事は体力勝負。決して楽な仕事ではない。しかし裕さんは、林業はやっぱり面白いと笑顔を見せる。

「森を守るためという理屈を超えて、とても達成感がある仕事です。広大な斜面も、地道に下草を刈っていったり、一本一本、杉の枝打ちをしていく。ひと現場終わって見上げると、きれいになった山がそこにある。仕事の成果がわかりやすく、やりがいも大きいです。

昼食を食べたあとは昼寝をするんですが、一瞬、山の中にいる事を忘れて目覚めると、ぱっと目前に広がる山の景色がとても新鮮で、何度見ても素晴らしい。先輩たちからは、その杉が植えられる何十年も前の山のこと、山仕事の風習など、現場でたくさん教わりました。山では人生で最高と思えるような幸せな時間がたくさんあるんです。

今後は、林業体験などで私の経験を伝えたり、若者が働くためのいい環境を整えていきたい。林業は伐採だけでなく、実は何十年にもわたり木を育てる仕事。イメージと実際のギャップを埋めながら、林業に携わる若い人が増えてくれると本当にうれしいですね」

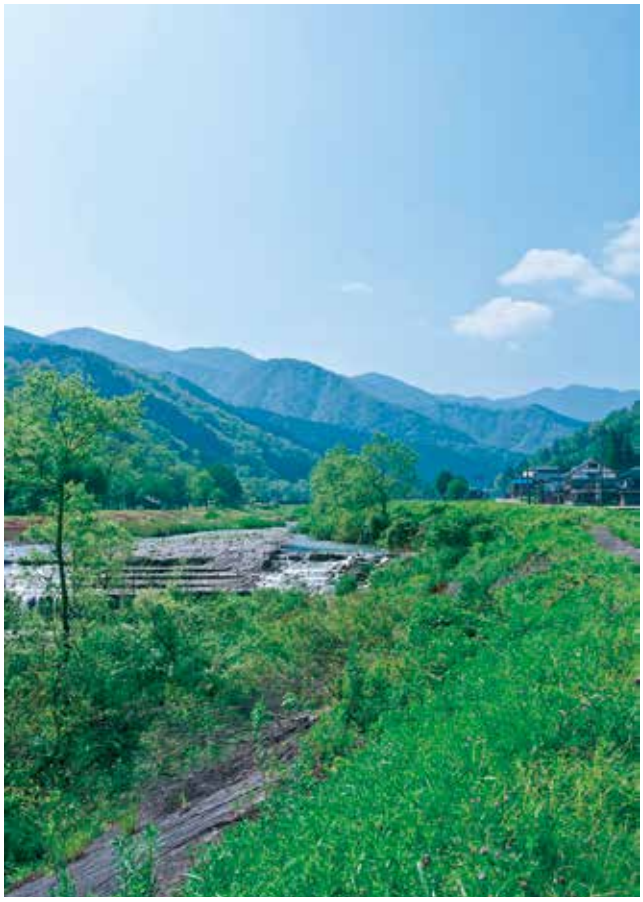
利賀村ではあまり利用されてこなかった広葉樹のクロモジなどの森資源を生かした商品開発にも美佐子さんは力を入れる。

「戦後に植えられた杉は、いま伐採の時期を迎えていますが、豪雪地帯の利賀で育つ杉は、木材として大切な根元の部分がどうしても曲がり、建築材料になりにくい面があるんです。そこで、もっと山の資源を活用して山の価値を高め、山の持ち主さんに、少しでも利益を還元できないかと。山主さんが山を子どもに受け継いでいけるよう、持続可能な山と村の将来に、少しでもプラスになればと考えています」

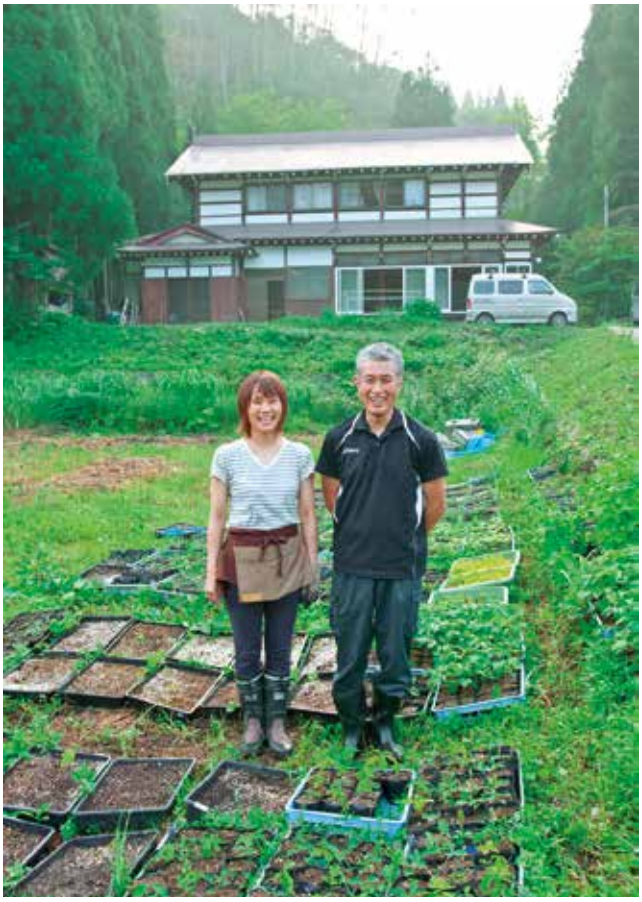
爽やかなとてもいい香りがするクロモジ。下草を刈っているときにクロモジを切るとすーっと香りが広がり、疲れを癒してくれるそう。整腸、抗菌、殺菌作用があり、お肌にもいいらしい。現在は、薬用酒の原料としてメーカーに卸しているほか、クロモジ茶などの商品も今後独自に販売予定だ。小さな一歩だが、利賀の山と水源を守り、次世代につなぐ一助にと夫妻は考える。

山の中で自分の体を精一杯使いながら働くことで、心が満たされていく林業。その良さを伝え、村の未来につなげたいと語る江尻夫妻。体を資本として働く人の健やかさと明るさ、山で生きる喜びが、まぶしいほどの輝きとともに、その瞳に宿っていた。

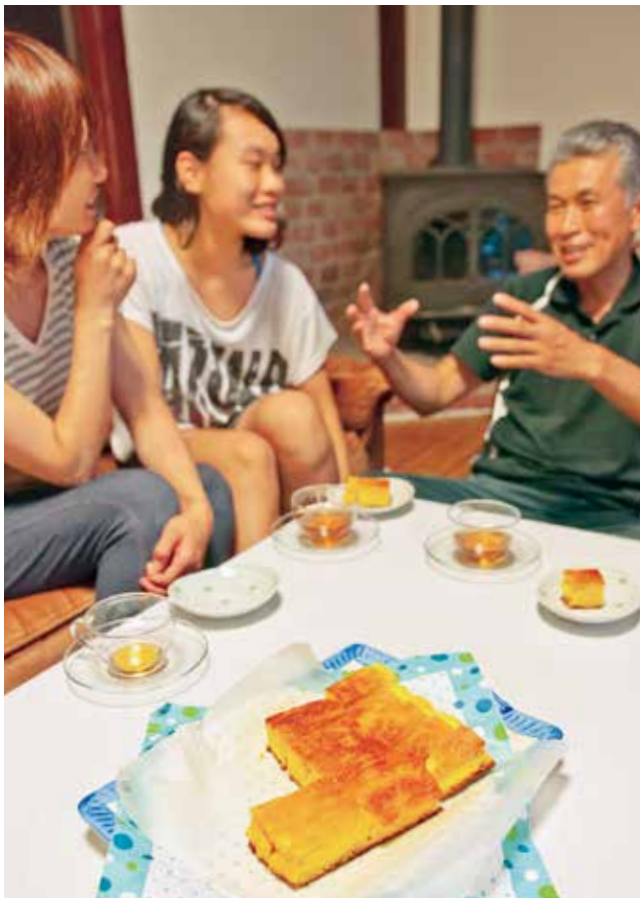
えじり ゆたか、みさこ　富山市生まれの裕さんと岡山生まれの美佐子さんは静岡で出会い結婚。16年前に利賀村に移住し共に林業に携わる。過疎化しつつある利賀村で森林資源を活用した持続可能な地域づくりを模索中。転職希望者や学生などの林業体験プログラム、環境調査も手がける。裕さんのモットーは「森が豊かになれば人の暮らしも豊かになる」。県内第1号の1級ビオトープ管理士（計画部門）。山の価値を高めようとクロモジを使った商品開発も進展中。
http://moribio.com/



美佐子さんお気に入りの百瀬川のほとり。美しい山々を背景に、清流では岩魚も泳ぐ。そばに利賀国際キャンプ場がありコテージで宿泊もできる。



「moribio森の暮らし研究所」を立ち上げた江尻さん夫妻。ともに趣味は仕事と語り、山の話題と笑顔が尽きない。少し小高い場所に建つ自宅前で。



次女で中学3年生の蕗さんと、美佐子さん手作りの自家製卵のカステラとクロモジ茶をいただく。蕗さんはバドミントン選手としても活躍。

江尻さん夫婦が山の先生と慕う宮本一郎さん。昔ののこぎりなど貴重な道具を見ながら目立ての基本、山仕事で大切なことをいつも教わっている。

富山の達人たちのとっておきの朝

今日の朝ごはん

立山町

井上育美さん

《今朝のメニュー》

◎土鍋で炊いた富山産コシヒカリ
◎お味噌汁
◎魚津産ウマヅラハギの醤油漬け
◎トマトのバジル和え
◎ギャルソンレタス
◎人参のソテー
◎白花豆のコーヒー煮
◎みょうがの甘酢漬け
◎ふきのとう味噌
◎アメリカンチェリー

土鍋の蓋を開けると炊きたてのお米の甘い匂いがたちこめる。立山町在住でセレクトショップ勤務、井上育美さん（34歳）の朝ごはんだ。

ご主人と中学3年生の娘さんと暮らす、それぞれが忙しい日々を送る中で、井上さんが大切にしているのが朝食の時間。

「娘を送り出した後、主人とその日の予定やニュースについて話しながらゆっくり頂きます。家族で同じものを食べる、この時間が大好きなんです」

この日は、富山米コシヒカリの土鍋ごはんにお味噌汁、魚津漁港近くの乾物屋で手に入れたウマヅラハギ。「土鍋は手間がかかるけど、ご飯が一番おいしく炊ける方法なんです」

ポイントは「朝ごはんが楽しみになるようなカラフルな見た目」。ギャルソンレタスやビーツなどの彩り野菜は有機農業をしている友人からの頂き物で、お気に入りの器に映える。トマトのバジル和えやみょうがの甘酢漬け、白花豆のコーヒー煮といった常備菜は休日にDVDを観ながらこつこつ作る。

「実家が何をおいても朝はしっかり食べる家でした。祖父が漁業関係の仕事をしていたことや祖母が畑をしていたことで富山のとれたての魚や野菜がいつも身近にありました」

結婚して誰かのために作るようになり、気づいたのは富山の食の豊かさ。「魚も肉もお米もおいしいし、スーパーで旬の食材が安く揃う。これほど恵まれた場所もそうないのでは。娘が将来家庭を持った時、私の朝ご飯を思い出してくれたらうれしいですね」。起きるのが億劫でも、ケンカした次の日でも、ごはんが楽しみで目覚める。家族のしあわせな朝を井上さんはその手で作っている。

いのうえ いくみ　魚津市出身、立山町在住。衣類や雑貨のセレクトショップ「ブルーポイント」（富山市）勤務。同店では月3回井上さんの調理によるカフェを開催。井上さんの朝食はスタッフの間でも評判で、将来的にメニューにも登場する予定。趣味はサーフィン。

富山県知事 石井隆一のとやま対談

富山の明日を視る

《ゲスト》
演出家・劇団ＳＣＯＴ主宰
鈴木忠志 氏

富山県南砺市利賀村を拠点に、世界へ文化を発信する鈴木忠志氏。東京一極集中や少子高齢化など、日本が大きな問題に直面するなか、利賀村をさらに国際的な文化拠点にしたいと語る鈴木忠志氏と石井隆一富山県知事が、文化を通した地域振興について語り合いました。

鈴木 忠志　すずき・ただし

演出家・SCOT主宰。早稲田大学政治経済学部卒。66年、劇団SCOT（旧早稲田小劇場）創立。76年、富山県利賀村に本拠地を移転。82年より世界演劇祭「利賀フェスティバル」開催。演出作品は『リア王』、『ディオニュソス』、『シラノ・ド・ベルジュラック』、『トロイアの女』など。国際的に活躍し、世界の演劇人に影響を与えている。

石井 隆一　いしい・たかかず

富山県知事。東京大学法学部卒。石川県、北九州市、静岡県などを経て、地方分権推進委員会次長、自治省財政審議官、総務省自治税務局長、消防庁長官などを歴任。04年より現職。03年から06年まで早稲田大学大学院客員教授。主著に「『元気とやま塾』入門―高志の国と世界を結ぶ」「分権型社会の創造」など。

演劇の聖地「利賀」

石井　鈴木先生には、南砺市利賀村に本拠を置いていただき、世界の演劇人が賛嘆する最高水準の演劇の創造と内外への発信のため大変なご活躍をされています。また、富山県の文化振興や地域活性化のためにもご貢献をいただき、感謝申しあげます。

利賀村は、世界の演劇人による創造の場として、また、近年は、中国や韓国などのアジアの演劇人との交流や若い世代の研鑽、育成の場として、国際的にも高く評価されています。

2年前には6か国の演劇人からなるインターナショナルＳＣＯＴが結成され、ＴＯＧＡアジア・アーツ・センター（鈴木忠志代表）も設置されました。昨年は、利賀村で、日中韓共同の「BeSeTo演劇祭」が20周年記念として開催され、今年は、上海戯劇学院との共同事業で、「中国版『シンデレラ』」が創作され、上海での公演は大成功だったとのことです。11月には、シアター・オリンピックス北京公演も予定されています。今や利賀村はアジアを代表する「舞台芸術の拠点」であり、「世界の演劇の聖地」とも言われるようになっています。

かつて先生は、早稲田小劇場を旗揚げされ、岩波ホールの芸術監督として活躍されているなか、38年前、突然、利賀村に拠点を移されました。決断された当時の思いをお聞かせ下さい。

鈴木　私が利賀村に来た当時、日本は世界第2位の経済大国になり、文化振興を旗印に、ホールや劇場、

美術館を各地に建てていました。しかし、オペラも美術品も外国から輸入したものが大半でした。当時、私は、経済力だけでは、一つの国が国際社会の中で存在感を発揮することはできない、国民が誇りを持つには、精神的なものもしっかりしないといけないと考えました。

例えば、ジャン＝ルイ・バローが使っていた劇場は、フランスの伝統的な建物を改造したものです。当時のヨーロッパでは、自分たちの伝統を現代に生かしていくという作業が盛んでした。

他方で、東京は外国のイミテーションばかりで、本当の日本というものが残っていない。幸い、利賀村には合掌造りなど庶民の伝統的な文化や生活、共同体が残っていた。これが本当の日本だよと世界に誇らしく発信していくことが必要だと考えました。木が大きく茂るためには根っこが大事ですが、この場合の根っこは伝統であり、日本の場合は、地方、そして利賀村に残っていた。それで富山へ来たのです。

石井　突然、利賀村へということで、劇団員の皆さんも驚かれたのではないですか。

鈴木　新聞などには、東京が発展しているときに、なぜ利賀村なのか、鈴木忠志は発狂したとか、書かれましたね。ですから、最初は大変でした。夜の食事は食パン2枚と牛乳で貧しかった。劇団員もあっという間に半数になりました。しかし、最終的に、日本を代表するいい文化商品を創れば、応援してくれる人が出てくるだろうと考え、利賀村での贅沢に使える時間の中で、しっかりした志を持ち、満足のいくものを創ろうと頑張りました。

石井　利賀村に本拠を定められて6年後の1982年には、日本で初めての国際演劇祭「利賀フェスティバル」を開催されました。その間は、先生が納得できる、日本を代表する舞台芸術、演劇作品づくりのために、集中的に劇団員とともに研鑽を深められた時期で、世界的に名高いスズキ・トレーニング・メソッドは、その間の苦闘、研鑽の中から生み出て、花開いてきたと推察しております。

鈴木　そうですね。東京からは忘れられ、利賀村でも、最初のうちは、連合赤軍のような人達が来たのではないかと思われたり、孤独でした。しかし、孤独の中であったからこそ、信念のある劇団員はものすごく結束しました。例えば、訓練のため、劇団員と雪のなか、利賀村から八尾駅まで、おにぎりを2つ持って歩いたことがありました。当時の野原村長は、これを見て軍隊の訓練より厳しい、真剣にやっていると感心して、以後、応援してもらえるようになりました。

私は、当時すでに、ニューヨークで教えたり、フランスに何度も招待され演出もしていましたから、西洋文化を模範としていた東京にいる必要がなかったんです。やはり、大事なのは、自分の同胞が住む日本、故郷をちゃんとしたい、自慢したい。日本のユニークさを誇示するためには地域が大事。その思いを持ち、国際的なコンテクストの中で、欧米人を驚かす優れた芸術作品、人間を創る。そうでなければ、世界の芸術家から、尊敬もされません。その活動拠点として、利賀村がいいと思っています。

今年も世界18カ国、150人のプロの演劇人が利賀村を訪れ、稽古やトレーニングをしました。利賀村の広い空間と合掌造り、茅葺きの屋根の劇場で、世界各国の人間が、毎日共に食事をし、議論や稽古をする。こんな山の中で、こんなすごい施設を建てて、これをプロデュースしている日本人はすばらしいと、皆が感動します。経済効率優先の東京ではできません。これを富山県が実現しているということは、自慢した方がいいですね。

文化振興は人間振興

石井　私が鈴木先生に初めてお目にかかったのは、23年前で、既に利賀村を拠点に、国際的にご活躍されていました。

静岡県の総務部長だった私は、当時の斉藤知事から、経済の面では相当の位置にある静岡県を国の内外に向けもっとアピールするにはどうすべきか、という課題をもらい、やはり文化の振興ではないか、と模索していました。そこで、政治や経済のみでなく文化の東京一極集中が進む時代に、どうしたら地方で世界に発信できるような文化振興が可能になるかについて、鈴木先生のご意見を伺いました。先生は、即座に「東京では文化の消費はできるが、真の文化の創造はできない。地方にこそ可能性がある」と言われ、大変感動しました。これを契機に、その後、静岡県には専属の劇団と専用劇場を有する舞台芸術センターが設立、運営されています。

自治省に復帰した後、平成5年に「地域文化の振興に関する調査研究会」（木村尚三郎会長（故人））を設置し、鈴木先生や磯崎新氏、吉田秀和氏（故人）など錚々たる方々にご意見やお知恵をいただき、「地域における芸術文化振興のための施策のあり方に関する提言」が取りまとめられ、平成6年の財団法人「地域創造」の設立につながりました。

文化振興のためには文化センターや劇場などの施設（ハード）の整備ありきではなく、どんな理念、目標のもとにどんな事業をするか、それにはどんな空間、場所が必要か、といったソフトを重視すべきという考え方は、今や、ある程度、スタンダードになりました。先生のご指導ご助言に改めて感謝申し上げます。

アテネ、静岡、モスクワなどでのシアター・オリンピックスの開催に先生が取組まれてきたのは、日本を文化の面で世界から、もっと高く評価されるようにしたいというお考えと、もう一つは、「文化の振興が人間の振興に、さらには地域振興にもつながる」というお考えもあったと思いますが、いかがでしょうか。

鈴木　そうですね。当時は、経済成長が人の幸福につながるという価値感でしたが、それでは人の精神的豊かさがなくなってしまうとの思いでした。文化の振興によってはじめて人間はいきいきするのです。それが人間振興なのです。

例えば、教育と文化は違います。教育は充電で、知識を蓄えるものですが、文化は放電です。放電することによって、人間が生きていることを楽しむ。ところが日本では、教育費にお金が出ても、文化振興にお金を出してこなかった。日本が中央集権、官僚国家で、しかも官僚たちは口では一応理解するけれど、何も実行しない。

しかし、当時、自治省から静岡県に来ていた石井さんが、文化振興の必要性を初めて理解してくれました。石井さんには、法令改正から議会の承認、地元説明に至るまでご尽力いただきました。それにより、専属の劇団と専用劇場を有し、芸術総監督に人事権と予算編成・執行権が与えられた画期的な「静岡県舞台芸術センター」が設立され、静岡で国際的な演劇の祭典である「シアター・オリンピックス」を開催することができました。

演劇を通しての社会事業

石井　先生は、最近、「いわば限界集落の利賀村で演劇をやるのは、通常の演劇人としての行動を超えた活動という以外にない。いわば、社会事業だともいえる」と言っておられます。SCOTでは、昨年度から利賀村での活動を社会事業と位置づけ、一律の入場料を廃止され、趣旨に賛同する方が、SCOTへの活動支援金として随意に「志」の金額を決める方式に改められました。この試みは、大成功したと伺っています。

鈴木　いい作品を創るのは当然ですが、単なる演劇の興行なら演劇好きだけが来ることになる。チケットで収益を上げるのではなく、私が地方の過疎地である利賀村に拠点を置き、日本がこうあってほしいという心意気で活動していることに賛同した人にお金を払ってほしいのです。今年は、アメリカにいる日本人の方から、頑張ってくださいと多額のお金をいただくなど、芝居は見にいかないけれども、支援してくれる人がたくさん出てきました。また、九州、四国、東北など、地方からも見に来ていただくなど、会員も三千人近くに、どんどん増えています。この考え方がいまの日本で貴重だと応援して下さる人が、随所にいるんですね。

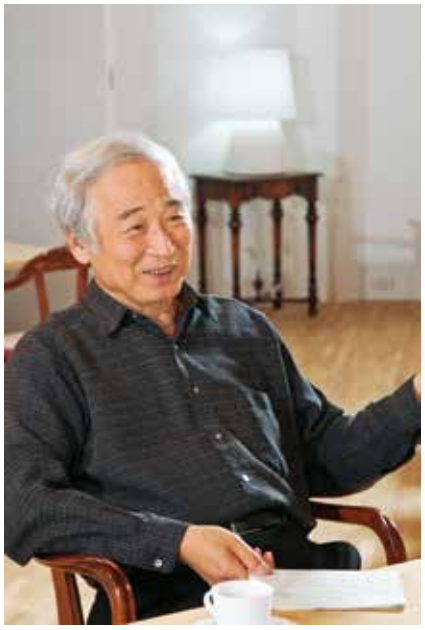
それで、社会事業ということに関しては、先日、地方の市町村の半分は今後25年位で消滅する危機にあるという日本創成会議の報告が出ました。そうならないためには、根本的にここは文化、ここは経済、ここは教育でという風に、地域ごとに特化する以外にないと考えています。そして、意欲のあるリーダーと行政が二人三脚で、その地域の個性を創り出せば若者は集まります。若者はお金ではなく、生き甲斐、社会での役割を探しています。若者を地域に呼び込み、

ユニークな活動を今後、20年後、30年後に向けて取り組むことが大事。そうすれば、地方の市町村の半分が消滅する、なんてことはありえません。

石井　例えば利賀村であれば、芸術文化の振興をポイントにして、卓越したリーダーである鈴木先生と行政が連携し、明確なヴィジョンのもとに地域活性化に取り組めば若者も集まってくる。それが一つのモデルとなり、地方で苦闘している人を勇気づける。すなわち、日本の本当の意味での再生には、地方を含め日本人の精神の元気を奮い立たせることが必要で、そこに先生の目標があり、それが、社会事業だということですね。

利賀をアジアや世界の文化拠点に

石井　先生をはじめ各国の演劇人により、2年前に設立されたTOGAアジア・アーツ・センターの活動を支援するため、昨年、TOGAアジア・アーツ・センター支援委員会（委員長・吉田忠裕ＹＫＫ会長）が設立されました。田中南砺市長も演劇を核に幅広く芸術文化活動の発展を図るTOGA国際芸術村構想を打ち出しています。県としても市や民間の皆さんと連携して、利賀がアジア、ひいては世界の舞台芸術の拠点となり、利賀村の活性化も図られるようサポートしてまいります。先生から、行政や民間の皆さんへのご提言をお伺いします。



鈴木　一つは、今、利賀には、6つの劇場、宿舎などの施設がありますが、これをアジアの文化拠点になるような形にしていきたい。そのためのハード面、ソフト面のシステムとして、TOGAアジア・アーツ・センター支援委員会の活動に期待しています。

　さらに、もう一つは、日本のユニークな身体文化を国際的な財産として、伝達し普及することです。そのために、日本人だけではなく、外国人にも開かれた国際的な文化機関を創りたい。スポーツ、武道や茶道、歌舞伎、身体のための建物という意味では建築もですが、日本がユニークなのは言語を中核とした文化ではなく、身体文化なのです。日本人の集団や共同体の作り方、自然と共生し闘ってもきた生活の知恵が、身体文化に結実しています。学術的な面でも一大拠点として、中国・韓国等の東アジアなど諸外国からも教授が集まる、アジア身体文化研究所というような機関を、国と協同して創ることが理想です。

　この利賀村は、広い場所で何ヶ月も滞在し、どんな国の人も平等にいて、それぞれ専門的な授業、研究に取り組める環境としては最高だといえます。そして、外国の人達がこれはすばらしいことだといってお金を寄付してくれるようにしたい。

　また、利賀塾を来年から創ろうと思っています。経済学者、社会学者、建築家やデザイナーなどいろいろなジャンルの人でグループをつくり、将来、中国、韓国、ベトナム、タイなど各国のオピニオン・リーダーになる人をここに滞在させ教育し、日本はすごいよということも示していきたいと考えています。

石井　初めてお会いした23年前、すでに、日本にもっと世界に開かれた場所を創り、単なる交流ではなく、異なる文化・文明がぶつかり、そこから新しい文化を創っていきたいと話しておられました。そういう場所に利賀村がなればうれしいことです。

鈴木　利賀村は前途洋々です。文化芸術では、6つの劇場、宿舎、近くにある温泉も含めて、これだけの施設があるところは他にはありません。しかし、今後、ここが維持されていくためには、やはり情熱がないとだめです。そういう情熱を持ってやる人がいるかどうか、そこが一番大事です。

石井　なるほど。舞台芸術や地域振興、ひいては日本の本当の意味の再興、再生についての鈴木先生の強い思いや情熱、お志を改めてお伺いし、感銘を受けました。先生には引き続き大いにご活躍いただき、利賀が世界に開かれた文化の創造と発信の場に、さらに国内外の人材育成の場にもなるようにリーダーシップを発揮していただければ幸いです。私も経済界や地元の皆さんと連携しながら、精一杯支援してまいります。

TOYAMA NAVI

富山にUIターン 元気とやま！就職セミナー

富山県では、将来、富山県へのUIターン就職をお考えの方などを対象に、富山県の就職環境やUIターン就職の進め方、富山県で働く魅力をお伝えする「元気とやま！就職セミナー」を東京・京都・大阪・名古屋・金沢各会場にて開催します。例年、セミナー参加者の方から「富山の良さを再発見できた」「富山で就職したい気持ちが高まった」とご好評をいただいていますので、ぜひご参加ください。詳しくは、下記のwebsiteをご覧ください。

富山県で働く魅力、戦略的Uターン就職活動の進め方（準備編）、県内中小企業の魅力発見などをお伝えします。
※内容は変更することがあります。

お問い合わせ：富山県労働雇用課
http://www.pref.toyama.jp/cms_sec/1303/kj00009870.html

「越中料理」首都圏キャンペーン開催

いよいよ平成27年春に北陸新幹線が開業し、東京と富山が約2時間でつながります。新幹線開業を間近に控えた今冬、首都圏の飲食店で富山湾のブリなど富山の食材を活かした料理を注文された方に抽選で富山の県産品を贈呈する「越中料理」首都圏キャンペーンを実施します。詳細は、ぐるなびホームページ又は「おもてなし『越中料理』」ホームページをご覧ください。新幹線開業後は、ぜひ富山で新鮮な魚や料理などをお楽しみください。

【飲食店の目印】

お問い合わせ：おもてなし「越中料理」魅力発信実行委員会
富山県観光・地域振興局地域振興課内　TEL.076-444-9605

とやまの素

「水」

おいしい水が、富山をつくる。

おいしい水を飲みたいなら、やっぱり富山。地下水を採取したミネラルウォーターはもちろん、水道水がそのままペットボトルで販売されるほど、水質の良さ、豊富な水量が自慢だ。

北アルプス立山連峰は、豊かな水源の代表格。3000メートル級の山々に降り積もる雪は万年雪となり、年間を通して豊富な水が流れてくる。植生自然度も本州で1位。豊かな森林が緑のダムとなり、浄化された雨や雪が、やがて急流河川となって平野を流れるため、いつも清浄な状態に保たれているのだ。

米どころ富山を育み、産業の発展の源になった富山の水。黒部川扇状地湧水群など県内8カ所の名水百選の選定は、全国最多。由緒ある名水を訪ねてみるのも楽しい。ミネラルたっぷりの地下水は、富山湾の海底などからも湧き出し、湾内の魚も湧水の恩恵を受けて育つという。

◎稲ワラ細工の後継者を募集中♪

砺波市の向井國子さんは、「五箇蓑」作りや稲ワラ細工の継承者。その繊細な手仕事と、材料作りのため、自ら田んぼで古代米を栽培する熱意に頭が下がります。自然の営みと調和した人の暮らしの知恵と技を後世に伝えたいと、後継者を募集中だそうです。

◎穫れたて野菜をいただきました。

持ち家率の高い富山県。特に農村部では、広い家の回りやご近所に、さらに広い田んぼや畑がゆったりとあります。そこで野菜や花を育てるのが、昔からの富山らしい暮らし。たくさん穫れたからと、ご近所からよくお裾分けをいただきます。感謝です。

◎庄川峡の湖面から見上げる紅葉がいい。

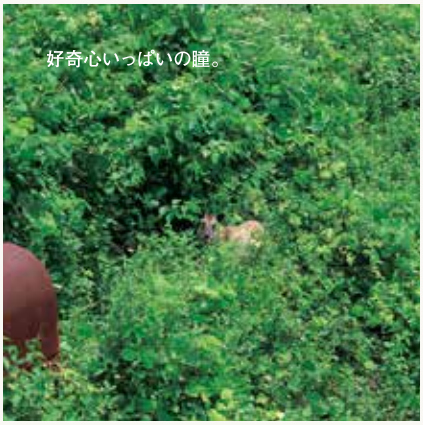
富山県西部、砺波市庄川町は私の故郷。気分転換によく訪れるのが庄川水記念公園周辺です。さらに上流の小牧ダムから庄川遊覧船に乗って、湖面から見上げる秋の紅葉も非日常感たっぷり。異郷を旅するようなスケールに、何度乗っても感動します！

◎瑞泉寺の太子堂の彫刻が素敵なんです。

南砺市井波にある瑞泉寺は、1390年に本願寺5代綽如上人によって開かれた歴史あるお寺。祖父母と太子伝会などによく訪れていましたが、改めて驚くのは井波彫刻の原点である欄間や柱の彫刻の素晴らしさ。特に「太子堂」の繊細で優美な彫刻は必見です。

写真と文：但田克美さん

砺波市庄川町在住。コピーライター「タダカツ」として、広告、グラフィック、CM、雑誌、WEB等の企画・制作に携わる。県内各地の取材を通し、富山の深い魅力を発掘中。ついでかけたくなるお気に入りの場所や、好きなものを教えてもらいました。



◎カモシカに久しぶりに出逢って。

この日は、立山町の山間の田んぼを訪ねる取材途中、澄んだ川のそばで富山県の県獣で天然記念物のカモシカに遭遇。夢中で草を食んでいた所をお邪魔してしまいました。しばらくじっと見つめ合ったあと、静かに川の上流へ帰っていったので一安心。

◎究極のお土産、五郎丸屋のT五。

美しいパッケージの中には、5つの風味のまあるいお菓子が入っています。五郎丸屋さんは銘菓「薄氷」で知られる老舗ですが、昨年、新商品T五が、観光庁主催の品評会で世界にも通用する究極のお土産に選ばれたとか。女性の「好き」が、一杯詰まっていますね。

◎富山市のガラス作家、小路口力恵さんの個展へ。

県内外で活躍中の小路口さんの個展で、制作への想いなど、直接お話を伺うことができました。まるいペーパーウエイトは、表面に水をたっぷりたたえたよう。空にうかぶ雲のような作品もあり、ガラスのやわらかさ、空間を優しくつつむ心地よさに改めて感動。

◎自然の循環を生かした暮らしの原風景。

かいにょと呼ばれる屋敷林に囲まれた農家が点在する砺波平野。夢の平スキー場から2キロ程の散居村展望広場から見た夕暮れ。樹木は雪や風、夏の暑さから家と人を守り、かつては木材や燃料としても使われていました。自然と調和した暮らしは、やっぱり美しい。

富山のあの人に聞く

いいもの手帖【二】

桂樹舎の手漉き和紙は、
私にとって「美のものさし」です。

桂樹舎のふくさ入れ　丈夫でたっぷりの収納が可能で、SHIMOO DESIGNの無垢の入れ子式立礼卓にもよく合う。ほかにも八尾和紙で作られた名刺入れ、バッグ、クッションなど多彩な小物があり、デザイナーとのコラボでも注目を集める。　◎2,700円（税込）　◎桂樹舎　TEL.076-455-1184　http://www.keijusha.com/

●抽選で5名様に桂樹舎の名刺入れをプレゼントします。詳細は本誌の挟み込みのアンケート用紙をご覧ください。

紹介する人　下尾さおり さん

高岡短期大学（現富山大学）卒業。八尾町の工務店で修行の後、97年に夫、下尾和彦さんとSHIMOO DESIGNを設立。無垢材を使った大小複数の卓や椅子をコンパクトに収納できる入れ子式の家具、プロダクトなど、現代の暮らしに合った洗練されたものづくりで人気を集める。企業や個人、一流ホテルのレストランほか多くの顧客を持つ。
http://www.shimoo-design.com/

富山市八尾町で、家具とプロダクトのアトリエSHIMOO DESIGNを主宰する下尾和彦さん、さおりさん夫妻。今回、さおりさんから、ご紹介いただいたのが、お茶席などで使う、ふくさ入れ。国の伝統的工芸品「越中和紙」の一つ、八尾和紙の製造と加工を手掛ける桂樹舎のもので、伝統の手漉きの和紙で作られた一品は、丈夫で独特の風合いと手触り、温もりがある。

人間国宝の芹沢銈介氏に学んだ型染めによる独自のデザインも特徴的。鮮やかで普段使いできる小物は若者にも人気が高い。

「普段の暮らしが美しくないと、ものづくりで嘘をつくことになります。とりあえずのものは買わず、好きなものに囲まれると心が落ち着きますね」と、さおりさん。これは桂樹舎創業者の故吉田桂介さんの美しい暮らしや手仕事、審美眼から学んだこと。優れた先人を「ものさし」として、新たな美を追求したいと、さおりさんは語る。

富山県
とやま日季　2014　秋号　　2014年10月発行　　企画・発行：富山県地域振興課　〒930-8501　富山市新総曲輪1-7　TEL.076-444-4496　FAX.076-444-4561
編集：北陸博報堂　　取材・文：タダカツ、松岡佐和子　　写真：室澤敏晴、東澤光明、ほか　　デザイン：宮田裕美詠、横村友哉、吉本愛　　印刷：とうざわ印刷工芸